

藤泰候によって建てられたもの。総高一四一・〇cm。
地輪に次の銘が刻まれている。

(正面)

曹溪院殿剛田勝公大居士
文禄二年癸巳八月廿九日

(左側面)

公為甲斐国守也、朝鮮
之役將兵在釜山浦以
病卒、実文禄二年癸巳
八月廿九日也、群臣奉
柩歸甲斐国葬善光寺
境内

公諱光泰封遠江守、仏
諡曹溪院剛田勝公、距

(右側面)

今百四十七年榮域願
損壞、乃差有司命修之

元文四年己未二月廿九日

六代孫予州大州城主

從五位下遠江守藤原朝臣泰候謹誌

それから半年ばかりして別の人が鎧を質入れに來た。
美濃屋は前の品によく似ていると思ひながら受け入れる
と、果たして前の品でその夜からまた毎晩家鳴り震動す
る。家人はこれは何か因縁のある品だと氣付き、質入れ
をした人を捜したが該当者は見当らない。仕方なく一年
ほど預つて、また古物商に売つてしまつた。その後半年
ばかり経つて、さらに別の人がこの鎧を質入れに來たの
で、番頭はあわてて、懸命に断わろうとしていた。そこ
ろが主人権兵衛は、その二、三日前より善光寺の阿弥陀
如来様の非常にありがたい靈夢を見ていたので、このや
り取りを聞いて、自分の店に同じ鎧が三度まで來るとい
うのはやはり特別の因縁があるに違ひないと言つて、そ
の緋威の鎧を受け取つた。

権兵衛はそこでこの鎧を持って甲斐善光寺へ行き、当
山五十世性誓靈海上人にこれまでのいきさつを語つた。
そこで靈海上人は以前この鎧を着た人の靈を慰めるため
に、七日間の追善供養を勤修し、後に鎧を埋めたのがこ
の地であるという。時に享和元年(一八〇一)のことであ
つた。 総高一八四・〇cm。

台石に次の銘が刻まれている。

(正面)

加藤淨雄建

ケヤキ 二株 (図40)

加藤光泰廟所の左右にある。廟所に近い方の幹周り(地
上高一・五m)は三・九m、遠い方は四・〇mで落雷の
ため上部が枯れている。境内では注目すべき大木。樹齡
は未詳ながら当山創建当初まで溯ると推定される。

鎧塚

金堂の北東約四百メートル、大田川を渡つた善光寺山
麓の松の古樹の根もとにある五輪塔。この塔には次のよ
うな話が伝えられている。

今からおおよそ百九十年前、江戸日本橋油町に加藤淨雄
美濃屋権兵衛という人がいて質屋を営んでいた。この人
は甲斐善光寺の信徒で、江戸における檀家世話人を務め
るほどであつた。ある日のこと、この美濃屋へ緋威の鎧
を質入れに來る者があつた。するとその夜から毎晩夜更
けになると家鳴りがし、家がガタガタと震動する。権兵
衛はじめ家人は皆奇妙に思いつつも特に鎧のせいとは考
えず、一年経つた。もう鎧を受け出しに來そうなものだ
と番頭ともども話し合つていたが誰も取りには來ない。
このようにして三年経過したため、とうとうこの鎧を古
物商に売り払つてしまつた。不思議なことに、その夜か
ら家鳴りはピタリと収まつた。

(背面)

東都加藤淨
雄、夙婦仏本
願、深信吾尊
像、寛政三年
捐淨財買酒
折邑山林、以
供永世念仏
之用、今茲享
和改元年酉、
仏誕日疊石
建塔、余欲□
□□德乃記
善光寺靈海

なお、加藤淨雄は寛政八年(一七九六)如来前に宝塔
も寄進している(三二六頁参照)。享和三年十月十日没。法
名德譽功勳淨雄居士(旧光田庵所藏位牌)。

首塚

鎧塚の南西約七十メートル、ブドウ畑の中の榎の根も
とにあり、天正十年(一五八二)小山田信茂の首を埋葬

したところと伝えられる。

天正十年三月、織田信長・徳川家康連合軍の甲斐進攻により、武田勝頼は築城成ったばかりの新府城に火を放ち、家臣の岩殿城主小山田出羽守信茂を頼って再起をはかることとした。甲府・勝沼を経て郡内地方に向かおうとする勝頼一行からは離反逃亡する者が相次ぎ、残ったのはわずか数百騎という有様であった。その上、敗走を続けてようやく笹子峠付近までたどり着いた勝頼を待っていたのは最後のひと頼んだ小山田信茂の謀反であった。信茂に裏切られた勝頼はやむなく天目山棲雲寺のふもと田野に逃れたが、このとき従う者はわずか百人足らず、うち武士は四十数人ばかりであったという。三月十一日、織田軍の先陣滝川一益が数千の兵を率いて勝頼一行に迫り、土屋惣藏等が奮戦したが、進退窮まり勝頼らは自刃、名門武田氏はここに滅亡した。勝頼の首級は善光寺にて織田信忠の首実検に付された後、京都に送られ六條河原で晒されたのである。

さて、主に背いた小山田信茂ら降将は善光寺に集められた。ここに身の危険を感じた信茂は夜半警備の隙をみて逃走。善光寺金堂の縁の下に隠れたが、善光寺地内の大泉坊という強力^{ツクリ}の山伏に発見され、ついに東光寺にて討ち取られたという(信茂の最後については他の説もある)。

るが、ここでは『武田信玄卿甲陽善光寺建立記』に拠った。そしてその信茂の首を埋葬したのが、この首塚であると伝えるのである。郡内地方では、一身を犠牲にして領国を戦火から救った小山田信茂に対する評価はなお高いという。

現在等身の石像地藏尊像などが立っていて、地元では旗持ち地藏と呼んでいる。

霊牛碑

鐘樓の東にある五輪塔が霊牛碑で、次のような由来が伝えられる。

延宝六年(一六七八)五月下旬、江戸芝牛町の某家に飼っている牛が主人の夢に現れ、多年の念願である甲斐善光寺参詣のための放免を願い出た。同じ夢が三夜続くため主人は不審に思っていると、六月初めこの牛は自ら牛小屋を飛び出し西の方に駆けていってしまつた。慌てた主人は後を追うが捕まえることができず、先日の夢告も思い合わせ放つて置くこととした。

一方、この牛は四谷口から甲州街道を一路ひた走り、六月十八日板垣村の善光寺近くの集落まで到着した。すると牛は一軒一軒家を覗いてまわる。人々は皆その行為が理解できず不思議に思っていた。すると、牛は或る家の

お咳婆さんの石

山門入ってすぐ右手にある。いつの頃からかお咳婆さんと呼ばれ、咳特に百日咳に苦しむ者は全治した時に飴を奉納することを約束して祈願すると、効験著しいといわれている。

阿闍梨の井戸

金堂後方にある、現在も清水が湧き続けている。

この阿闍梨の井戸は信濃善光寺にもある(現在は阿闍梨池と言ひ、以下の話(『霊像記』による)とは多少伝承が異なるようである)。そもそも信濃善光寺のその井戸は、法然上人の師であり『扶桑略記』の撰者としても有名な肥後阿闍梨皇円と深いかわりがある。嘉応元年(一一六九)六月十三日、この皇円は臨終のまぎわに弟子の澄算に次の様に語った。

私はこのたび魂を遠州桜が池(静岡県掛川市)に移し、弥勒菩薩がこの世に現れる五十六億七千万年の後まで静かに待とうと思う。しかし、その間にもし心が退転し年来の宿願が果たせないといけないので、滅後は毎年大晦日の夜に信州善光寺に参詣し、仏種の縁が失なれないようにしようと思う。その一夜の止宿の場所として、私は滅後信州善光寺の金堂の辺りを穿と

前に汲み置いてあつた水のみつけるや、口をさし入れ身を清め直ちに金堂に参詣したのである。牛の四足を折りまげ身を低くして頭を垂れる様は、誠に人が如来を拜むが如きであつた。四時間ばかりそのようにじつとした後、牛はおもむろに立ちあがり、金堂の東側に移つて駐まること七日間、八日目によりやく善光寺を出て江戸芝牛町の主人の家に帰つて行つた。その後二十日ばかりして突然牛は死んだので、主人はこれを深く悲しみ、霊牛としてその角二本を善光寺に納めた。そこで、そのうちの一本を埋め塔を建てて信心深い牛の末代までの記念としたのである。なお、もう一本の角は現存する。総高一四〇・五cm。

地輪に次の銘が刻まれている。

(正面)

□□霊牛□□

(左側面)

奉参□

(右側面)

□建證□

(背面)

時延宝六天

六月十八日